
呪われた白球



注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われた白球

【Nコード】

N4656C

【作者名】

○

【あらすじ】

災いシリーズ第三弾。今回は健康的なソフトボールで壊れます。

誰かのせいで間借りしていた他校の校舎が全壊してから一週間後。校内暴力がエスカレートしたとか、学校同士の抗争などの噂が流れ、どこの学校も校舎を貸してくれないという状態に陥った学校側は、何とか仮校舎で凌ぐ事にした。そして全館プレハブのみすばらしい代物が完成。

あの騒動について対外的には、どこかの過激派が乱入してきて暴れまわったという事になったらしい。

「確かに過激ではあったな」

相変わらずちんまりとした小学生にしか見えない晶が、眼鏡をハンカチで拭きながらつぶやいた。

「死者が出なくて何よりでした」

こちらも相変わらずむやみに背が高く、高校一年に見えない秋彦がつぶやいた。

今日は不幸続きの学校の雰囲気を変えようと、クラス対抗スポーツ大会が開かれていた。

「何でこいつらと一緒なんだ」

不満そうな晶。

「一応、仲良しグループと思われているようです」

普通に秋彦。

「機嫌悪そうだね。僕の特製ドリンクでも飲む？」

いつもどおりの矢野。

「このバットってどうやって使うの？」

信じ難い矢野。

晶たちスカポントンは、ソフトボールに出場していた。

俊足豪打のセンター晶、緻密な頭脳のキャッチャー秋彦、そこそこ普通のファースト西村、脅威の足手まといファールフライ担当の

矢野。

ちなみに晶は斬新なポジションに移った矢野に代わり、誰もいないライトも担当している。

晶たち四人と、じゃんけんに負けた不幸なクラスメート五人のチームは順調に勝ち進んだ。

そして昼食をはさみ決勝戦。これに勝てば優勝という事になる。

「よし！ いっちょ行くか！」

気合を入れる晶に、西村がコップを差し出した。

「調子はどう？」

「絶好調だ。今の俺ならプロの球も打てそうだ」

コップを受け取りながら答える晶。

「ところでこれは何だ」

「僕の特製ドリンク」

「危ねえ！！」

コップを投げ捨てる晶。

「もう少して飲む所だった。早く言えよ、そういう事は」

「あつ、なんか失礼だなあ。大丈夫だよ、ちゃんと動物実験もやったし」

「……というと、隣の家のか」

「うん」

「で、どうだったんだ？」

「普通に元気になって、穴をいっぱい掘ってたよ」

「それだけか？」

「うん、だから大丈夫だよ。みんなにも飲んでもらったし」

「何だと！」

振り返ると、じゃんけんに負けた不幸なクラスメート五人が、コップを持ったまま不安そうな顔でこっちを見ていた。

「え……これ飲んだら毒とか？」

「……いや、人体にとって毒ではないと思うが……これまでの経験

からして」

複雑な表情の晶。

「何か変わった感じとか無いか？」

「いや、なんか普通に力がわいてくるけど、それ以外は特に何も」

「そうか……ならいいんだ」

そこへ秋彦がやってきた。

「どうしました？ 兄さん」

「西村の特製ドリンクが出たぞ」

「ええ、みんなに配ってましたね」

晶はちらりと秋彦を見上げた。

「止めようとは思わなかったのか？」

「さすがに何回も同じ失敗は繰り返さないでしょう。それにおいてと評判ですよ」

「まさか……おまえも飲んだのか？」

「とんでもない。人間に飲ませるのは初めてという物を試すほど勇氣はありませんよ」

「……」

晶は腕を組んだまま押し黙ってしまった。

一抹の不安を残し、決勝戦は始まった。

一回の表、晶のチームの攻撃。一番セカンド森がバッターボックスに向かう。

「おい森、本当になんともないか？」

晶が尋ねる。

「ああ、なんかすげえ力がわいてきて、何でも打てそうな気がする」

「……そうか」

バッターボックスに立つ森。秋彦が不安そうな表情の晶に話し掛けてきた。

「兄さんも心配性ですね」

「今までの実績を考えてもな、このまますむとは思えないんだが」

「まあまあ、もしいつも通りだったとしても、もう手遅れですし。心配してもしようがないですよ」

「……」

晶は飄々とした秋彦から視線を外して、森の方を見た。

森はバッターボックスでバットを振っていた。何回も振っていた。何回も、何回も振っていた。そして次にバットを振り下ろし始めた。

何回も、何回も振り下ろした。

振り下ろして、振り下ろして、振り下ろした。グラウンドがみるみるえぐれて行った。

「……秋彦、どう思う？」

「いつも通りですね」

「どうする？」

「任せてください。こういう事もあるかと、準備していた物があります」

秋彦はそう言うと、ポケットから細い管のような物を取り出した。

「何だそれは」

「吹き矢です。矢じりに即効性の麻酔薬を塗ってありますから、もしもの時の鎮圧にもってこいです」

「……そう」

力なく頷く晶を尻目に、秋彦は筒をくわえると森に向かって矢を発射した。

激しく地面をえぐっていた森は、突然糸が切れたように倒れた。

「……しょうがない。秋彦、回収しに行くぞ」

晶と秋彦の二人は森を抱えてバッターボックスからどけた。

「今のは一アウトという事にしといてくれ」

言葉もない審判にそう言うと、晶たちは森を抱えて自分のチームに戻った。

一回の表、晶のチームの攻撃。2番レフト本村がバッターボックスに向かう。

「大丈夫かよ……」

「まあ、ひょっとしたら森君だけかもしれないし」

晶はため息をついて本村のほうを見た。

本村はなぜかミットを持ってバッターボックスに立っていた。

本村はミットを振っていた。何回も振っていた。

何回も、何回も振っていた。そして次にミットを振り下ろし始めた。

何回も、何回も振り下ろした。

振り下ろして、振り下ろして、振り下ろした。グラウンドがみるみるえぐれて行った。

「秋彦、頼む」

「はい」

秋彦は吹き矢をくわえると、本村に向かって矢を発射した。

激しく地面をえぐっていた本村は、突然糸が切れたように倒れた。

「行くぞ」

晶と秋彦の二人は本村を抱えてバッターボックスからどけた。

「今のでニアウトという事でよろしく」

言葉もない審判にそう言うと、晶たちは本村を抱えて自分のチームに戻った。

一回の表、晶のチームの攻撃。三番ショート吉村がバッターボックスに向かう。

「……………」

「……………」

吉村は、ちゃんとバットを持っていたが、何も着ていなかった。

「……秋彦」

「はい」

秋彦は吹き矢をくわえると、全裸の吉村に向かって矢を発射した。何も着ていない吉村は、突然糸が切れたように倒れた。

「……行くか」

晶と秋彦の二人は裸の吉村を抱えてバッターボックスからどけた。

「じゃあチェンジという事でよろしく」

言葉もない審判にそう言うと、晶たちは裸の吉村を抱えて自分のチームに戻った。

一回の裏、相手チームの攻撃。晶はこれ以上試合を続ける事に疑問を抱きつつも、センターの守備位置に到着した。

そして振り返ってみると、グラウンド上にはキャッチャーの秋彦しかいなかった。

グラウンド中央へ走って戻る晶。大体予想はついたが、あえて確認のために秋彦に訊ねる。

「秋彦、他の連中はどうした」

「みんなどこかへ行きました」

「どこか？」

「はい」

「……具体的には？」

秋彦は冷静に指差しながら答えた。

「斎藤君は一塁ベースとホームベースを持って体育館のほうに走っていきました」

「武田君は奇声をあげながらプレハブ校舎にむかってほふく前進を」

「……そういえば矢野は？」

「叫び声をあげる審判の人に抱えられて校門の方へ」

「……西村は？」

「それを追いかけていきました」

「……そういえば相手チームは？」

「皆さん服を脱いでどこかに走り去りました」

「ちよつと待て、あれを飲んだのはうちのチームだけじゃないのか？」

「いえ、みんなです」

「みんなというと」

「たぶん、私たちを除く全員ではないかと」

「……………」

「おいしいと評判でしたから」

頭を抱えてしゃがみこんでいた晶が、ゆっくりと立ち上がった。

「……とりあえず、先生たちに報告してこれからどうするかを」

「先生方でしたらあちらに」

秋彦が指差す先では、教師たちが一心不乱にプレハブ校舎をひっくり返そうとしていた。

「……………」

「どうします？　兄さん」

「帰って寝る」

「そうですね」

プレハブ校舎がひっくり返る音を背に晶たちは帰途についた。

その後、付近住民の通報により警察が介入。学校は一ヶ月ほど閉鎖される事になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4656c/>

呪われた白球

2010年10月8日15時31分発行